

文京区アカデミー推進計画策定協議会  
第2回国際分科会

日時：平成22年5月17日

午後18：30～20：30

場所：文京シビックセンター21階 2101会議室

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

(敬称略)

「出席委員」

座長	久松 佳彰
委員	伊藤 明子
委員	佃 吉一
委員	森岡 隆
委員	國分 眞史
委員	小野 光幸

「事務局」

アカデミー推進部観光・国際担当課	小野 光幸
アカデミー推進部アカデミー推進課	橋本 淳一
アカデミー推進部アカデミー推進課	佐藤 祐司
株式会社富士通総研	稲永 和年
株式会社富士通総研	中川 法子

○**久松座長**：それでは第2回「文京区アカデミー推進計画策定協議会 国際分科会」を開催いたします。お忙しいところご出席いただきありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。まず事務局から出欠の確認をお願いいたします。

○**事務局**：本日の出欠についてご説明いたします。本松委員から所属団体の総会のため欠席の連絡が入っております。また熊田委員から風邪のため欠席の連絡が入っております。出欠状況は以上でございます。

○**久松座長**：くれぐれもご健康にはご注意ください。続きまして事務局から配付資料の確認をお願いいたします。

○**事務局**：配付資料の確認です。まず事前に郵送でお送りした第1回国際分科会の次第等、クリップ止めの資料はお手元にありますでしょうか。また、本日の席上配付の資料ですけれども3点をお配りしております。1点目が座席表、2点目が分科会ご意見シート、3点目が東京都区市町村の国際政策の状況調査における文京区の状況となっております。

それでは資料の説明をさせていただきます。本日の議事進行は次第に沿って進めさせていただきます。次第の1ページをおめくりください。第2回分科会の進め方についての資料がございます。こちらについてご説明いたします。

まず1番、第2回分科会テーマをご覧ください。本日のテーマはアカデミー推進計画にかかわる文京区の特徴や課題、解決の方向性を確認再検討するということとなります。

続きまして2番、本日のプログラムですが、次第と重複する部分がございますのでこの場では割愛させていただきます。

次に3番、文京区の特徴や課題、解決の方法性の再検討をご覧ください。本日の分科会ではこの後皆様にステップ1～4の順番に従って議論や作業をしていただきたいと思いますと考えております。事務局の説明は以上でございます。

○**久松座長**：ありがとうございました。事前にお配りさせていただいたステップ、それぞれ時間の目安というのが入っておりますが、先ほど私早めに来て整理をしたところ、これはもうちょっとフレキシブルになるんじゃないかなと。特に少し前回の復習を、我々ちゃんとしないと何を話したかと、後ろのほうに、前回の戦いの後がございますけれども、おいおい思い出してやっていきたいというふうに思います。それから、今回第2回分科会でありまして、第3回には我々が今日整理し発言したことを基に、何らかの叩き台としての文章が、多分事務局のほうから出て来るのではないかと。そういう想定で最初に分科会を始めておるわけです。そういうこともありますので、いろいろ掘りこんでしゃべっていくという、深くしゃべっていくということと、それから、その議論のそれぞれポイント、ポイントを論理付けていくということもやっていければと思っております。

それでは次第に沿って本日の議事を進めてまいります。まずは、前回の分科会での検討内容をまとめた資料が3ページがございますので事務局より資料の説明をお願いいたします。

○**事務局**：では3ページの資料第5号に基づき説明をいたします。富士通総研より説明いたします。

○**事務局**：よろしくお願いいたします。今、先生からご説明がありましたが、こちらに皆さんが第1回の分科会で作業をしていただいたものをお持ちいたしました。お手元の資料の「資料国際第5号」と振ってあるものが、ポストイットに書かれたものを、そのまま文章として書き起こし、いろいろまとめさせていただきました。このまとめに従って見出しを付けたものを表としてお配りしているものですので、ちょっと見にくいところもあると思いますので、内容についてはこちらのお手元の資料をご理解ください。第2回の分科会を始める前に、第1回の作業がどうだったのかということをお手元でもう1度振り返りたいと思います。

この紙が文京区の特徴とはどういうところにあるだろうか、特徴はどのようなものだろうかというこ

とを皆さんにいろいろ意見をいただいたものです。例えば外国から来た人が多い。その中でも特に留学生ですとか研究者といった知的作業に携わるような方、大学がいっぱいありますので、そのためだと思いますが、方が多いといったような特徴を出していただいております。こちらが文京区にはいろいろな数々の素晴らしい地域資源がいっぱいあるんだよ、という点です。例えば歴史と文化、大学がいっぱいある、学問の府という感じがする。アジア学生文化協会がある、等々といった地域の資源、特徴として挙げていただいたものです。

こちらは文京区の方の気質についていろいろユニークなご発言をいただいたものでして、いろいろ皆さん、レベルが高い、芸術文化を愛する人が多い、国際交流に感心を持つ方も多いが、ややちょっと自分のことに固執されている方が多いのではないかというようなご指摘などをいただいております。

こちらがそれでは国際交流に関してどういった課題があるのだろうかということをもとめたものになります。ちょっと折れちゃったりしていますが、資料を1ページめくっていただいて裏面になります。まず出てきたのが場所があまりないんじゃないかといったことです。それから取り組みがあるにはあるのだが、単発式で継続した取り組みがないんじゃないかというご指摘がありました。それから例えば場所もないし、窓口がよく分からないといったご意見がありました。それから外国語対応をしているようなお店も少ないんじゃないか。秋葉原とかに比べると少ないんじゃないかといったご意見もありましたし、例えばこちらは区民の方が結構個に固執してしまっていて他を受け入れないといったような気質があるんじゃないかといったこと。それから少しずつ拠点はあるんだけどネットワークが図れていない。人材もあるんだけどネットワークが図れていなかったり、あと残らなかつたりして、屋外に出て行ったりしてしまうことがあるといったことがありました。それから交流の目的とはそもそも何なんだろうといったことについても結構話が弾んだと思います。区の方から、例えばそれは区民の方が継続して交流していただくことだというご発言もありました。

これらの課題に対して、こちらの2枚が皆様に考えていただいた解決策です。緑で付けたものがその見出しになります。資料だと4～5ページにまたがります。交流の場がないといったようなご意見がいろいろありましたので、そういう場を整備してもっと使いやすくすることが必要なんじゃないだろうか。参加しやすい、そもそも機会をもっと増やすべきじゃないだろうか。我々のほうとしても受け入れ態勢を整えるべきじゃないだろうか。交流の人材はいるんだろうけど、もっとそれを担い手として育成する必要があるんじゃないだろうか。あとは区内の事業者に対して、例えば商品を開発したらどうだろうかというようなご意見もありましたし、神社とか仏閣等々でもっと外国の方に向かって開いたらどうだろうか。それからいろいろな取り組みをしているので、それをもっと効果的に伝える必要があるだろうといったご意見が出ました。あとは窓口を整備して分かりやすくすること、インターネットを使ったり等々で周知方法をもっと工夫しよう。施設ももっと使いやすくしよう。ネットワークが図れていないのであれば、ネットワークをもっと進めるようにしたらどうだろうか、といったことが前回に皆さんで考えていただいたことになります。

前回はこの解決策について結構話が弾んだところがありましたので、もう少しグループ分け、少し急いでグループ分けしたようなところがあります。そういった点もそのまま皆さんのお手元に、そのままの状態でお示ししてありますので、これを見ながら、今回はこのことについて漏れや抜けがないだろうかとか、この課題に対して、解決策としたらもっといい方法があるんじゃないか、といった点を特に検討していただければと思います。以上です。

**○事務局：**続きまして、前回のご意見シートによりいただきました皆様のご意見・ご質問などを紹介させていただきます。

まず本松委員から、前回お配りした「東京都区市町村の国際政策の状況」につきまして、文京区とほかの自治体との比較についてご質問をいただきました。席上配付いたしました「文京区の状況」という資料に基づいて説明いたします。

文京区の特徴としましては、23区の半数以上が実施している国際政策はおおむね行っております。ただし、その中で資料の中17番になりますが、17番の「通訳派遣制度」は行っておりません。また調査結果では行っていないとした項目でも、実質的には行っているものに26番～28番までの教育講座

や語学講座、地域交流事業などがあります。こちらは調査の対象となった平成20年度は区が直接実施したのではなくて、財団法人文京区アカデミーに委託をして行っていました。また29番の「民間国際交流協力団体等の支援・連携」については情報の提供や後援名義、イベントを行うときに後援するという名義の使用等で支援・連携は行っております。ただ経費の助成などは原則として行っておりません。ほかの区であり実施していないものは文京区でも実施していない傾向にあります。その中で31番の「国際交流基金の設置」は文京を含めて4区のみで国際政策となっております。そのほかに本松委員からは外国人が主催する事業に区民が参加する、こういうのがよいのではないかというご意見をいただいております。

続きまして森岡委員からは、区としての国際交流の目的を示してほしいというご意見をいただいております。区としましては市民同士の交流を活発にしていって、さまざまな世代や団体の方が自主的・継続的に交流して、こうした交流が進んでいく先の、いわゆる目的としましては、外国人を含め区民の皆さんが安心して暮らせるまちをつくることであるというふうに考えております。

そのほか、今後の議論につきまして財源等、実現可能な課題について具体的に検討したらどうかというご意見をいただいております。

続きまして、國分委員からはご意見として3点いただいております。1点目は国際交流を支える土台として、異なる歴史文化を持ちながら心が通っていることが大事であるというご意見。2点目はこれが「文の京」だというメッセージを積極的に伝達するという、顔の見える自治体を訴え掛けることが必要であるというご意見。3点目、日本は欧米に比べて異文化を市民単位で受け入れるという活動の歴史が浅いことが課題であって、そのための仕組みづくりが必要であるというご意見。そしてその仕組みづくりとして区の人材養成講座を修了した人、認定を受けた人を活用していくこと、また交流の場として、例えばセンターを設置することなどが考えられるというご意見をいただきました。前回のご意見シートにつきましてのご説明は以上でございます。

**○久松座長：**ありがとうございます。委員の皆様、ご意見シートをありがとうございます。最初に説明していただきました資料の第5号、表1～3までございました。こちらの模造紙に移したものが移ってるということですが、これは前回の分科会での皆様のご意見をまとめた資料になっております。これを文章にしていく段階で、事務局のほうでは先ほどの都区市町村単位での状況などというのも合わせ考えると、ひょっとしたら、あまり先日の議論でカバーしていない分野もあるのではないかと、そういうご報告をいただきました。私もそれを検討したところ、そうかなと思いました。同意しましたので私のほうから、こういうテーマもあるのではないかとということでお知らせをしたいと思います。

3つございます。1つ目は外国の方が安心して暮らすという点、国際交流をするという、我々と交流する、いろいろな方が交流するという点での話はあったわけですが、区民・市民として安心して暮らすという、日本で暮らすための言葉・文化・習慣などの不安を低減する、ともに暮らしてまちづくりをしていこう、そういう視点も若干なかったかということが1つです。

2つ目は、交流ではあるのですが、外国の方が地域社会に入っていくとして、そこで入っていけば我々と交流するわけですが、言葉や文化、習慣など、お互いに理解を深めていく、そういう視点も必ずしも明確に出たわけではない気がします。

3つ目、これはかなり具体的などころですが、以前の会ではお話も出たかもしれませんが、姉妹都市・海外都市との交流ということですね。市民レベル及び自治体における交流を推進するというところで、伊藤さんのほうからドイツに行かれてこういう経験をした、ということは伺いましたけれども、それを全体としてどのように考えていくか、という視点は必ずしも明確ではないように思います。外国人が安心して暮らすための視点、外国人が地域社会に参画していく視点、姉妹都市・海外都市との交流、この3つの点です。この点について事務局から何か補足説明はございますか。

**○事務局：**1つ目の「外国人が安心して暮らす」の視点ということですが、この先、次回以降の分科会で具体的な事業例まで皆様に考えていただくように進めていくと、例えば日常生活に関する相談や法律相談といった事業例が考えられるのかなと思います。そうすると、これまでご議論いただいた交

流ということからは少し離れてしまうのですが、文京区として必要な取り組みは何かという点からご検討いただきたいと考えております。補足説明は以上でございます。

○久松座長：ありがとうございます。それでは今申し上げた分野、それから前回に出てきた表1、まず初めにご説明いただいた資料の表1、つまり模造紙でいうと黄色のほうになります。「国際交流に関する特徴」について出された意見の中で追加すべきところ、こういうこともあったな、こういう意見が出ていたんだけど、これは削除してもいいんじゃないか、そういう足すところ、消すところがあれば、表1 国際交流に関する特徴、外国から来た人が多い、素晴らしい地域資源が多い、意識の高い区民が多い、それ以外のことも含めてですが。また、こういうふうに言ったつもりだったのだが、このようにまとめられるとちょっと違うんじゃないかと。私が言ったことと違う、何でも結構だが、この表1について検討していきたいと思います。何かお気づきの点はございますでしょうか。

○國分委員：これは重複しているような形のものが1つこう、今日はまとめていくわけですか。

○久松座長：まずはこれで、重複しているのは別にいいわけですけども、これで足りないというんだと困るわけですね、だから……。

○國分委員：足りないものを挙げればいいですね。

○久松座長：それから間違っているというのはどういう意味かわかりませんが、少なくともそれについて議論をしていったほうがいい。ここはどういう意味なのだろうということですね。その当たりを検討していったほうがいい。もう1度見ると、例えばこれはどういう意味なのだろう、とかということで議論を深めてもいいですし、この表1のところ、もう1度文京区の国際交流に関する認識を共有していこう。そういうことです。どなたでもよろしいのですが。

○伊藤委員：外国から来た人が多いというところの3つ、同じような項目が載っていますね、留学生・研究者が多い、留学生が多い、留学生・外国人・研究者が多い、ということなのですが。どういうジャンルに外国人が所属しているのか、医学関係なのか、出版関係なのか、文京の地場産業があるのでどういうことをしているのかというのは全く見えません。そういうのが調べることができるのでしょうか。あるとしたら医学者というか、その関係の人が多ければ、市民が喜ぶようなことに何か寄与していただくとありがたいかなと思うのですが。

○久松座長：留学生であるということで付き合うことって、なかなか難しいわけです。せいぜい語学をしゃべりますとか、その地域での何とかを。でもその方が自ずと、今伊藤さんがおっしゃったような医学を勉強されているということだと、医学の話英語ですと。そういうことでいろいろ発展ができる可能性はありますね。

○伊藤委員：そうですね。

○國分委員：そういう意味では、今地場産業とおっしゃいましたが、駐在員というのを加えてもいいかもしれませんね。外国から来られたビジネスマンというか、住んでいる方、ということだと、それは文京区の中に住んでいる方で勤務は別のところかもしれませんが。

○久松座長：そうですね。

○國分委員：これは研究者に集中したのが3つ入っていますよね。留学生・研究生というような形で。比較的ビジネスに携わっている外国人駐在員というのは日本語を勉強していたり、比較的意識が高いですから、わりと意見を言うていただくことが多いと思いますから。これは森岡さん、ニュージーラ

ンドの方なども駐在されている方もいらっしゃるのでしょうか？

○森岡委員：そうですね、結構。

○小野委員：文京区って、本当に海外の人がたくさん住んでいらっしゃるのですか？

○國分委員：私のマンションにも1人いますしね。

○伊藤委員：アジア系は確かに多いです。

○佃委員：住むといっても、やっぱり金が高いですからね、広いスペースを取って、研究者ですと、家族いてってなると、来たいけど、というのはあるから、そんなに私はいるとは思えない。大学にはもちろん教えたり、研究交流でたくさん来てお出でだとは思いますが、その方々が、例えば東大ですと、まだあそこの関口のほうの国際会館ができませんので、あれができると200~300入りますので一気に増えると思います。それから早稲田関係はほとんど宿舎、和敬塾のほうに行っておりますので、そのあたりは研究者よりもちょっと下かもしれませんね、マスターかどこか、普通の学部かもしれませんが、そういうところでないと集団でたくさん持って、大学はほとんど宿舎を持っていませんから、この近辺には、東洋大学もそう、いわゆる留学生宿舎はほとんど持ってない。

○久松座長：今度、千駄木に研究者と留学生用の宿舎ができます。

○佃委員：そうですか。そういう学校がどんどん増えてくると、そういう意味での連携が取れるようになると思いますね。

○小野委員：外国人登録されている人は7,000人程度です。それはほかの区に比べて決して多くはないです。ですから住んでいる人よりも研究者として通ってきている人は多い。

○佃委員：多いと思います。東大が大変多いですから。東大の大学院はほとんど全部そこに力を入れるという考え方ですので、学部の学生なんかは入れないという考え方ですから、4,000人~5,000人にする予定です。あとは、もしかしたら向丘のところに200室ぐらいの留学生会館を同時に造る予定ですので、そういったところできると一気に増えるかと思えますね。ただ長くいるかどうか、2~3年ぐらいかもしれませんね。

○伊藤委員：そうですね。流出してってしまうのですよね。日本の大学生だって4年過ぎるとどこかへ行ってしまうということもあるし。

○久松座長：1つは住んでいない方でも昼間人口としていらっしゃるって、何か参画していただけるかという論点と、それから、まあ少ない期間でもお住いになっている方だと、日本の文化なりお祭りなりを味わいたいというようなことがあるかもしれませんので、特徴をとらえれば、そこと特徴を結び付けるということも可能な気がします。外国から来た人が多いという最初の分類のところにお話が来ていますが、そのところでも、あと2つ目、3つ目のところでも結構なのですけれども。それ以外のところでも結構ですけれども。森岡委員さん、いかがでしょうか。

○森岡委員：ちょっと喉が痛く、声が出ないので、すみません。

○國分委員：今、私が駐在員、留学生、研究者、駐在員と申したのは、私の経験から来ていることで、長年の友人が、もうリタイヤしたのですが、アメリカのロチェスターに本社があるK社の日本人の社長をやっています、彼が駐在している間に浜松とロチェスターの間の姉妹都市協定を結びまし

て。東京に住んでいたのですけれども、日本にいて、そういう文化に興味を持って、それでアメリカのそういうところに紹介したり、意外とそういう地域に対する不安を持つ人が駐在員の中には多い傾向が強いものですから、今の事業の3番目に姉妹都市交流の視点を入れてくれというのがございましたので、それであれば、学生さんや研究者よりも、比較的そういうものいろんな提案をしてくれるとか、比較的姉妹都市協定の場合は、どうしても行政的な手続きが必要になってきますから、相手先の国なり市のボランティア団体なり、そういう市民団体とつながりのある方が、いろいろと文京区のPRをしていただくと、わりとつながっていくかなと思います。ですから「外国から来た人が多い」の中にビジネスマンが入ってなかったものですから、それを加えたらどうかという次第です。

○久松座長：ありがとうございます。

○伊藤委員：あと交流って言えるかどうか分かりませんが、この下の国際交流と関心の高い区民が多いという最後のところですね。理解をしてくれる、過去にチェルノブイリの女性の歌手が来て演奏会を開いたことがあります。それからモンゴルの歌手も招いて数回やりました。その2組の人たちが、チェルノブイリの場合は基金をしてもらいたいということをおられました。それからモンゴルの場合も、歌っている歌手が、とにかく学校を自分の国に造りたいんだっていうことを熱烈に話されて、支援をしてもらえればというようなことをその場でおっしゃって、ちょっと私たちは慌てちゃったんですけど。そういったような協力をしてあげられるとか、何かイベントしたときに応援してあげたいという人もいましたので、その場に。それを最初から目的にした演奏会ではありませんが、たまたまご自分たちの述べたことに対して答えて、応援してあげたいということで応援してくださった方も何人か出ましたので、外国の方たちが望んでいることに答えられるようなことを何かしてあげるといいのかなと思った、経験からですけど、そんなことも思いました。

○久松座長：ありがとうございます。意識の高い区民というところと、実際にそういう人レベルでの交流というふうに、できかかっているというようなことですけども。この地域資……

○伊藤委員：ただ、それは単発なのですよ。その場で終わってしまうというところが、私がかかわっていたところはそういうだったので、それが継続して……

○森岡委員：よろしいですか。今のお話にちょっと関連あるかもしれませんが、私ども前にもお話しました塩沢とオーストリアの関係、これは一番のベースになっているのはスキー、スポーツを通じてのベースなのですが、塩沢はセルデンというところと姉妹都市提携をしているのですが、セルデンの町に1回洪水がありまして、大きな洪水で橋が流れてしまった。そのときに塩沢の町で町民から寄付を募ってその橋を復旧しました。それには塩沢の名前が確か付いているはずなのですが。そういうベースがあって、先ほどの話のように1回だけじゃなくて、そういうこともあれば、いろんな形でお互いに助け合えることができるのではないかと思います。それで、これの目的というのにちょっとこだわら、この前もそんなお話をさせていただきましたが、やっぱりそういうものをきちっとしなきゃいけない。

例えばニュージーランドには、今40の姉妹都市が、確か40を超えたか、そのぐらいあると思うんですけど。ネピアというテッシュペーパーがありますけど、そういう紙で結び付いています。それからこの近所でいくと、箱根の町はニュージーランドの北島にある一番大きい湖、タウポ湖という湖と芦ノ湖と結び付いているのです。だからそういうものがあると、比較的何かをするにしてもやりやすいということは事実だと思います。

それで前にもちょっとお聞きしたのですが、では文京区としてはそういうことを何があるか。私が手前みそですけど、子ども論語塾というのを伝通院さんで、今年6年目になりますけれども、それは孔子の論語で文京区の湯島に湯島の聖堂がありますね。湯島の聖堂と例えば中国の山東省の曲阜は孔子の生まれたところですけど。私は近いうちに1度子どもを連れてそこに行きたいという計画を持ってまして、今、子ども論語塾の目的が2つありまして、1つは論語500章を1章から500章まで



通してやるというのが1つ、それから参加したいという人、来る人は拒まず去る人は追わずで、とりあえずいきましょうというので、今、1月に1回ですけど、伝通院の会館が溢れる、100人でいっぱいだと思うんですけど、多いときは130人ぐらい来ます。これは親子と、それから最初はそんなに集まると思ってなかったものですから、高齢者の方も一緒にやると。それから家庭に置いていくわけには行かないという幼稚園の子がいるので「連れてっていいか」というご家庭がありまして、その方もどうぞとっております。幼稚園から80過ぎの方までが1つの空間の中で子曰（しのたまわく）ということで、みんなが大きい声を出すのです。それがまた非常に1つの雰囲気をつくるというのが、論語塾で文京区のほうからも後援をいただいているわけですが、できればその500章を終わったぐらいのときに、子どもたちを連れて山東省の曲阜へ行って、向こうの子どもたちと交流をしたいなという1つの目的を持っているのですが、そういうふうなもので孔子の論語でつながって湯島の聖堂もある。そういうつながりもいいかな、というのが私の1つ考え方にはあるのですが、これは最終的にどういう形になるかはこれからの問題でして、ぜひ実現ができればいいというふうに思っております。これはある程度具体的なつながりができておりますし、孔子の論語というものをベースにしていけば年齢に関係なくその都度、そういう目的で。私たちの論語をという目的の、先ほど言ったことと子どもたちが成長の段階で論語の言葉に触れて、いろいろな形で活かしてもらえればいいという程度のことから始めて、決してそれ以上のものを望んでいるわけではないのですが、おかげさまで今はこういう状況になってまいりました。

**○久松座長：**ありがとうございます。交流の具体例、それから交流をする上での基盤としての、海外とどういう共通点を持っていくかということ、さらには地域資源ということでの湯島の聖堂、いろんなポイントが出てありがとうございました。ほかにこの国際交流に関する特徴、あとはこういう地域資源のところ、もしくは以前に國分さんからの護国寺の話とかも出たかと思っておりますけれども。ほかに何かございますでしょうか。

**○國分委員：**今、伊藤委員のほうから地場産業というお話がありました。文京区の場合は新宿とちょっと重なっているかもしれませんが、江戸の昔から紙と印刷環境は非常に歴史があって、それなりの職人さんも多いところで、それで凸版印刷さんの印刷博物館にもそれなりの展示をなさり、またヨーロッパの印刷の発祥の都市との交流も区というのではなくて、凸版印刷さんの場合はなっている。ですから、そういう地場産業つながりというような形は、姉妹都市という事業との間でも、しっかりといろんな形のものが出るし、企業も協力していただけるという形になります。今、私をご紹介しました友人の浜松とロチェスターというの、私は相談を受けて詳しいことは分かっていますが、発端は浜松にあるヤマハと、これは地場企業ですね、それに着目したのは、ロチェスターにはジェリアードと並ぶ音楽大学がありまして、ロチェスター音楽大学ですが、そちらとのいろんな交流の中で生まれてきて、それで姉妹都市となりまして、毎年お互いの子どもたちが交響楽団を作ってやって、これが非常に重要だと思うのですが、ボランティア団体とその中に企業が入って、ヤマハさんも入るし、向こう側の大学も入って、非常に予算も含めてダイナミックな交流が2都市では毎年今でも続けられているようです。

それは1つの例で、今森岡委員がおっしゃられたような形にもつながるわけです。伊藤委員がおっしゃられた文京区らしさということになると、やっぱり地場産業なわけですから、私はそういう浜松の例などを見ていますと、凸版印刷さんとか、それから出版社がありますね。ですから、そういう形のものも1つ着目してみてもいいのかなと思いました。

**○久松座長：**そうですね。地域資源としての地場産業、それがあってずっと続いていく、そこから自ずと関心が似たようなところにある。多少資金的なサポートもあるかもしれない。そういうところは非常に重要な指摘かと思っております。ほかに何かございますでしょうか。この国際交流に関する特徴というところでは。

**○森岡委員：**よろしいですか。ちょっと偏った意見かもしれませんが、やはりそれぞれの子

もたちに、できるだけいろんな国の、自分で、体で体験してもらおうというチャンスを提供するだけ与えるべきだろうと思っています。それから最近高齢者が、文京区にも文化のサークルがあると思います。やはりそういう方たちが、例えば絵を描くグループ、写真を撮るグループ、いろんなグループがあると思いますが、そういう方たちが積極的に外国人の人たちとそういう交流をするということも1つの国際交流になるのではないかと思います。そうすれば、まず元気で少しでも長生きしていただければ、そういう意味でのプラスになるのではないかと思います。

私はあくまでもニュージーランドとのつながりが深いものですから、これなんかはニュージーランドの南側にあります有名なカンタベリー大学という素晴らしい環境の大学がありますが、去年行ったときに、そこのラーニング・フォー・ライフというか、生涯学習というものの資料をもらってきて、どんな内容かと思いご参考になればと思って持ってきたのですが。例えばガーデニングなんかは非常に盛んな国ですから、そういうものを通じて交流する。アメリカのように豊かな生活環境も含めて、そういうもので交流するとか、語学のグループであれば生きた英語をホームステイをしながら勉強するとかいうことができるのではないかなと思っています。ぜひそういうチャンスを区民の皆さんに、こういう機会につくっていくことが、こういう計画ができると思うのですけれども。まず取っ付きやすいところということでやっていくほうが長続きするし、皆さんも参加しやすいと思います。

**○久松座長：**ありがとうございます。では、まず表1についてはここまでとして、また何か思い出すことがあれば戻っていただければと思います。続きまして表2に移ってみたいと思います。それから合わせて前回途中になりましたけれども、表3のところ、表には国際交流に関する課題、そして表3はその課題に対する解決の方向性。ある意味では非常に近いところですので、この2つについて追加すべき点、削除等、広げるなり、狭めるなり、横線を入れるなりいろんなご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。かなり具体的なところまでお話も出ているかと思っていますので。

例えば先ほど自ずとやっている交流というのを国際的なものに挙げていくというような。そしてその姉妹都市にしていくとか、なっていくとかという、話が出たわけですが。どうしても姉妹都市というと、行政的なものがあつたりして非常に硬い、もうちょっとたくさんレベルがあると楽かなというか、「まずはやってみよう」というぐらいのところからいろいろ深まり合っていくって、先ほどの塩沢のお話ではありませんが、お互いの災害に同情し心を通わせ合うということまで結実していけばいいと思うのですが。なかなかそのところが姉妹都市になってないかなるかだけですごく差があるような気がして、そういうところは難しいなとお話を伺って思ったのですが。いかがでしょうか。国際交流に関する課題、それから課題に関する解決への方向性というところで、ざっくばらんに。

**○伊藤委員：**さっき凸版印刷のお話がありますね。あれができたときに400人ぐらいが入る立派なホールができています。それで音楽家の卵たち、舞台に出るチャンスがない人たちに開放というか、契約があるとは思いますが、お昼休みの45分間は区民が無料で聴ける演奏会というのが年間6回ぐらい、確か公開でやっています。要するにお昼休みに当たる時間ですけど、前もって申し込んでおくと、チケットを無料でもらって。その代わり演奏する側は聴いてもらいたい、自分が学んでいることを聴いてもらいたいという、舞台を提供しているというか、何かそういう大きな企業に、しっかりと話し込んで、海外の人たちのイベントを年に何回か場所を貸してほしいというような形でお願いするとか。どこの国の誰というふうに少ない人数じゃなく、大勢の文京区に在住したり、携わっている人が集まってきて、外国人同士も交流できる、日本との交流ももちろん、そのためにやっているわけですけど。また外国人同士の交流もしていけるという場所のために、大手の企業とか貢献してもらえないかどうか、そういうのも調べてみるのもいいんじゃないかと思っています。

**○國分委員：**今、伊藤委員がおっしゃられた凸版印刷というのは、私は機会があつて何回も伺ったり、インタープリターの人たちのいろんな活動の中で交流があるのですが、実は交流の場の充実と使いやすさの促進の中の2番目に交流センターを中核としてミューズネットワークの場を再構築すると書いてありますけれども。これは私が書いたものですが。このミューズネットワークの中に凸版印刷さんも入っているんですね。文京区さんのふるさと歴史館は歴史とか文化のことを訴えている。それから

講談社の野間美術館もこの中に入っているんです。それをずっと拝見して思っていたのですが、今委員がおっしゃられたように、1つひとつの民間の、ふるさと歴史館は違いますが、それ以外のところは、1つひとつのところはそれなりに運営なさっています。私たち区民が、今おっしゃったような「こうしてもらいたい」という1つのコンセプトで共通に訴えて、そういうネットワークにまではなっていないのではないのかなど。もったいないなという。ここ永青文庫もそうなんですけれども、1つひとつは立派なものがあるのですが、それを例えば国際交流ということであれば、外国人の方が利用しやすいように持っていけないかと考えると、なかなかまだ外国人が気楽に凸版印刷さんとか、野間美術館とか永青文庫にパッと行けるような、インフラというかにはなっていない。まだ、お互いの煩雑さがありますから、それを国際交流という視点で見れば、それをうまく活用できないか。ですから今の交流センターというものを、ここで設けておけば、そこに情報をやっておいて、森岡委員がおっしゃったミュージアムもそうですが、いろんなニーズを持った方を、それぞれの形できちっと情報提供して、例えば、私が属しているインタープリターもそうなのですが、「それであればふるさと歴史館にご案内しましょう」とか、英語観光ボランティアという方がいらっしやいますが、いろんなことが出て来ると思います。

ですから、この2番目の私が書いた理由は、今ある既存の仕組みをうまく活用すれば国際交流にできるんじゃないか、という意味で再構築という表現を書きました。まさに凸版印刷さんなんかはもったいないと思います。そのためにはネットワークですから、やはり核になるものがあって、やらなきゃいけませんので、第1回目で森岡委員がおっしゃられたように、観光インフォメーションの隣が空いているわけですから、例えばそういうものを活用するか。ただ、そのために形だけ作っても意味がないので、今おっしゃられたように文京アカデミーさんが養成されているボランティアの方もいらっしやいますし、いろんな方がいらっしやいます。英語観光ボランティアの方にお聞きしても、もっと自分たちを活用してほしいという声もありますから。そういう形で、来年から発動するところを持っていけば、区民と区側のもっとこうしたいというものになるような気がするのですが。抽象的な話で恐縮ですが、2番目のところはそういうイメージです。

**○久松座長：**箱物としての交流センターではなくて、人の束として、そこでいろんな交流というものが行われていって、新しい風をふんだんに入れていこうという、そういう交流センターというもの。

**○國分委員：**外国人の方がいらっしやって、交流センターで、この方が行きますからお願いしますと、凸版印刷さんにパッとぶつけても迷惑な話だと思うのです。ですから凸版印刷さんのほうに、こういう方が区のボランティアの、例えば観光ボランティアの方がご案内しますとか、例えば姉妹都市協定をニュージーランドで交わすとすれば、ニュージーランドの方がいらっしやった場合に、どこかでプレゼンをする。そうするとニュージーランドにはない江戸の歴史をちょっと紹介したいとなると、ふるさと歴史観に国際交流のプレゼンができるようなコーナーでも設けていただいて、そのときに英語観光ボランティアの方とインタープリターが迎えて説明するとか、という形の交流であれば姉妹都市も、もっとつながっていくのかなというのが私のイメージなんですけれども。

**○森岡委員：**私も人が集まるということが大事なことだと思うのです。人が集まるということは情報が集まるということだと思いますので、やっぱりにぎやかに楽しく、言葉は適切じゃないかもしれませんが、いい意味でのたまり場を作っていただければ、いろんな情報が集まってきますし、そこで例えばアンケートを採ることもできるでしょうし、どういう国とかかわりがあるということも、そこである程度分かってくれば、何かをやるときにこの国のことだったら、文京区にこういう人がいるから、そういう人に手伝っていただいたり、またそこで一步前進すれば、その方を中心にそういう組織ができてくる、それはそれでいいのではないですか。

**○佃委員：**安心・安全とかというときには、今、私どもで考えているのは、東京都の場合ですが、自治体に出るのに外国人が外国人登録証を取りに来たときに、どうやってこの街を紹介したり、どうしたら快適なのかを、そこまで見られる動画を含めたもの、それを全国のネット共有で、区特有のもの

があれば付加して、基本ベースを作りながら日本の自治体にどうしたら外国人登録証を取りに来たときにでも、ごみの出し方から何かを含めたものを見てもらえるかとか、交流したければこういうところで、相談はこうだというの。外国人登録は必ずしなければなりませんから、そういった場所の近辺をどうやって整備したらいいかというのが1つ課題にしているんです。

それから外国の方を本格的にということであれば、これは行政も一体化しなければなりません、やっぱり外国人の方が表現できる場をどうサポートし作っていくか、つまり、どこかアフリカの国がそういうことをアピールしたいと。観光も関係すると思いますが、そういったときに、それを全面的に場所もタダにして、呼び掛けもタダにして、というようなサポート体制が行政でどれくらいできるか。それは芸術を生み、文化を生みということに発展していくので。それが例えば文京区のどこかの場所なのかは分かりませんが、その場所なら、そういう客ならば優先してやらせてあげようということで、外国の方がより利用しやすいような施設と同時にそれをサポートしてあげていく。

例えば今、タイのほうで国を上げて代々木公園を全部貸し切って、イベントをやって、食事をして、タイフェスタですね。何万人と出て行くわけですけど。これはあそこの代々木公園の広い場所が、それ一色になるわけですね。これは国によってできるところとできないところもあります。もし、そういう方々にサポートします、というようなもの、学生さんなどを含めて、あるいはニュージーランドでやってる日本人の団体と、そういう国の方が一緒になって何かしようとか、そういうことがあれば、あらゆる便宜をできるだけ図る方法も行政の機能の中にあると、外国人が安心して自分の国を表現したりして、文化を日本に広める。それを学ぶ機会が一番近いところの人が遊びに来るわけですから、自然に学んでいくというような形ですね。やっぱりわざわざ遠くにでかけるのは大変なことです。そういうような学生さんも合わせてボランティアも合わせて、どこか、何かできないのか。国別なのか、地域別なのか、分かりませんが、何かそういう企画をやって、そこに交流して、ある意味では文京フェスティバルというのは、それをもう少し柔らかく広げていけば。コーディネートとかが大変だとは思いますが、できないことではないというのが感じるところです。

それからあとは教育関係、子どもたちのほうとしては、私たちも国際理解教育をやってはいるんです。文京区の小中学校ですから、それはやってはいるんですけど、教育委員会が動いているのか、その学校の先生が1人動いているのか、どうも学校の先生1人だけだろうと。つまり区を挙げて教育委員会でそういう国際化の人材を作ろうというのは、まだ方針になっていないのでは、あるいは自分の国の子どもたち、文京区民にどうやって文京区民としての自覚とか、それを含めたそのあたりはどうなのだろうかと。私たちもやってはいるんですけど、もしそういうことが有機的に、行政と教育委員会と地域がうまく結び付くことがあればいいなというふうには思います。私どもは今度、小さいことですが、地域の50人ぐらいの寮が、地域の人を呼んで食事を作って交流会をこの28日にやるのですが、皆さん楽しみして寄付まで持ってくる人もいます。作る学生のほうもそれを伝統にしたいと言ってきているので、それですぐ台湾にその情報を流すと。だから何とかやらせてくれと。私ども、この前は学園祭というようなことをやったのですが、それが去年はインフルエンザでできなかったのも、何とか今年やらせてくれと。これは全部、すぐインターネットで各国の自分の国に流すから、というふうなことを言ってるわけです。そのやってる内容といたら食事をいっぱい作って、各国料理を作って、赤字出すわけには、お金をもうけてるわけじゃないですけど、材料費だけいただいて各国の料理を作って、簡単なイベントをやってという範囲なんですけれども。そこに地域の人が5、600人~1,000人くらいは来るわけです。買い物ついでに来るようなところがあるんですけど。こういうものを期待して、外国の方もやってみたいというのは、私ども、小さなところですけど、そういうのはどこかあるのかなっていう気がするんで、それをもう少し社会的に観光などを合わせて、何か有機的に合わせながら、その国の表現をできるということを1つ、そういうものに触れる「文京区民は得だぞ」という意識はやっぱり知的なところ、それから心の触れ合い、そこに集まってくるのはだいたい若い人がやりますので、その辺りに年配者の多い文京区の人でもそういうところには気軽に行けると。やっぱり年配の方が、じゃあ高校で何かイベントをやってそこに行くかといっても、なかなかやっぱり敷居が高い。それを外国の方がやっているのだったら、ちょっと遊びに行ってくるかと。逆に言うところもあるかもしれませんが、食べ物を含めてあるならば、という感じはしますね。ちょっと感じたところはそういうところがあります。以上です。

○久松座長：ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。今は交流する場所、それから充実の仕方の話です。

○伊藤委員：スポーツをやっている外国人って、結構生活的にも大変な中でやっているという話を聞いたことがあるのですが、そういう人たちを何かの形で支援してあげられるみたいなイベント、例えばバザールみたいな、そんなに難しいことじゃなく、日本人がわっと大勢行くというような感じのものをやってあげて、それを支援していつてあげるとい感じのものをしてあげると、1つの固まりができて、毎年やるという感じにしていくと、だんだんに外国人も寄ってくる人が増えてくるでしょうし、日本人も少しお役に立ってあげられるっていうようなこと、今バザールと言いましたが、そういったことで貢献できるものがあれば、ただ集まって交流というと、なかなか、特に文京に来ている外国人ってどういうレベルの人か分からないけど、何となく国によっても違いますよね。固まって何かする国もあるでしょうし、非常に個人主義的なところもあるでしょうし、なかなか集めるというのは難しいと思うので、なるべく難しくないものでやるのも1つの手かなと思います。BX、文化シヤッターって小石川にありますけど、あそこも文京区の音楽とか講演会とか、そういうところに半額くらいで安く場所を貸してますね。私たちが借りたことがありますけど。文京区の中でそういう活動している方に「どうぞ、お使いください」というのを確かうたっているんで、そういうところ、例えばお寺や神社とか、そういうところもそうだと思うんですけど、そういうところをもう少し活用していったらどうかという、もしイベントみたいなことをして大勢の人集めるのであれば、そういうところを利用していくというのも1つの手ではないでしょうか。

○佃委員：お寺のイベントは、前はタイの人がやったのですよ。千駄木の、やはりそういうことに興味あるお寺さんの住職さんと一致しないと。全部境内借り切ってわいわい賑やかにやりますので。そういう方がおられると成功しますわね。

○國分委員：護国寺さんなんかは、本当に外国人の方は喜んでいましたけどね。やっぱり京都・奈良にだいたいあるものが、綱吉のお母さんの桂昌院が持ってきただけに。私もおととしの企画のときに、初めて1つひとつ拝見しましたが、もったいないですよ、ああいうものが活用されないというのは。

○伊藤委員：そうですね。

○國分委員：非常に楽しい雰囲気、今伊藤さんがおっしゃられた楽しい雰囲気を出しているからいいですよ。やっぱり来場者数が増えたっていうのは、そこにあると思うんですね、楽しくないといけないですね。

○伊藤委員：そうですね。何か変な話だけど、のど自慢を見てると、ときどき外国人が日本語で上手に歌を歌ったりしてますね。カラオケで覚えたとか何か。

○國分委員：NHKのど自慢大会ですね。

○伊藤委員：ええ、NHKのです。すごいなと思って見てるんですけど。

○佃委員：それもいいのではないかと思いますよ。国際交流フェスタでやっているカラオケ、みんなやっていますし、日本の文化の1つですから、だいたい1つぐらいは覚えて帰ろうとか思っていますし。

○伊藤委員：楽しみながらやるのも1つある。

○**國分委員**：今印刷で凸版印刷の話をしたのですが、当然印刷とつながって出版社も多いわけですね。千代田区の秋葉原が世界的にマンガでやってますけど、本当はあれだけ出版社が多いんですから、文京区もそれでいいわけで、何かつなげていけば、別にマンガにこだわる必要はないんですけども、その外国人の方が楽しく入れるものを、それは講談社さんも小学館さんもあるわけですから、何か企画を立てればいけるんじゃないかと思うんですね。

○**佃委員**：学生募集なんかすると、まず「秋葉原は近いですか」と聞いてきます。その次が渋谷。その次が新宿。池袋はあんまり聞いてこないけどね。文京区は大学が多いのだからってとか言って。やっぱり人気的是秋葉原ですね。その中に多分日本が持っている最先端の技術から、今はやりの文化の何か凝縮しているんでしょうね、外から見たら。それが文京区までのほうに、湯島を越えて流れるには東大があって、あそこは敷居がちょっと高いから、それで、今度はそのまま後樂園まで引っ張り込むには、まだボクシングとかそういうのは、そんなにはといて。なかなか文京区の目玉が大学漠然としては、だからもちろん東大なんかは、それに関心ある人はもちろん強いんですけども、わざわざそこまで学生を集めに、僕らの場合学生ですので、そこまでそんなにたくさんいませんので、むしろ一般の私立の大学とか、そちらのほうが多いんですけども、ま、その辺りで、ちょっと文京区という特徴って何だろうなというときに、静かでもいい環境だとは言うんですけど。

○**國分委員**：私は外国人の友達とよく話をして、来て案内するときに、私は文京区のPRをしているものですからと言うのですが、秋葉原のようには何にもないですよ。ただ、若者が集まってオタクの人が行ってこうなって、それが世界的にこうなってる。文京区の場合はそれを作ってるのがあるわけで、印刷会社は最新鋭のマンガのカラーのものはきちっとやってるし、出版社はそこんところで企画を立ててやって、本当はそちらのほうなんですよ、という話をすると「ああ、そうですか」となるんですけども。なかなか秋葉原がもう国際語になっちゃいましたからね。

○**佃委員**：あといずれは、もうちょっとしっとりした高級価値観を求めている中国の人たちも、今はほとんど日本の価値観そのものにあこがれるっていう時代ですから、それプラス高品質、ゆったりした生活感とか、そういうものの全部があこがれの対象にはなってくるのだからと思うんですね。今、ビザが緩和されて観光で、学生はあこがれると思うんですが、留学生では負けてるんですけど、日本における関心は来てるんです。観光のほうは今まで預金が300万の人が今、80万あったら全部ビザが出ますので、だいたい今までは600万かな、何かだと言っていたのが、今度は4億人ぐらいがターゲットということ、ああいうのも流れてくると思いますよ。秋葉原へ来て何となく。ただ本当の観光地は彼らから見たら別のところらしいんですけど、箱根だとか京都だとか、北海道だとかあると思うんですが。少なくとも流れとしては来るというのが、ちょっとそういう意味では国際化っていっても、また今度は留学生プラス別の要素が入ってくるかもしれませんね、この辺の領域の中にも。はっきりしたことは言えませんが。

○**久松座長**：東京都の観光のアンケートというのをたまたま今日見ているんですけど、渋谷であるとか赤坂、秋葉原とか、こうなるんですけど。この中に文京区があるかなと、1つもなかったですね、20個ぐらい挙げてあったんですが。

○**佃委員**：千駄木とかないですか。

○**久松座長**：ないです。そこは観光部会に頑張っていて、名前が載るように提言をしていただければと思いますけれども。かなりいろんな芽はあるんですけども、そこがいろいろとつかえているというタイプの話が多くて、もともと昼間の外国人人口が多い。それから数年間いらっしゃる人が多い。そうするとなかなかつなぎ留めにくい。いろんな国際にかかわらず交流のイベントはたくさんあり、それから地域資源もあるんですけども、そこがそれぞれに立っていてネットワークのほうはできているんですけども何か回らない。でも個別個別のところではあって、きちっとやってらっしゃる

ところもあって、それぞれにはそれなりの手ごたえがある。で、どこに一步進もうかというようなことなんでしょうか。

○伊藤委員：文化資産がいっぱいあるわけだから、その見て歩きっていう感じで、そんなに長いコースじゃなくて、取りあえず案内をしてあげて、それで一個所、例えば護国寺に到着したら護国寺の一室を借りて、日本に文化についての講演会とかセミナーとか、そういう形でコミュニケーションを取れるような、どこかセンターを作れるのが一番いいかもしれないけど、それは金銭的な問題も大変だと思うので。歩いていった段階でどこかに止まるというんじゃおかしいですけど、溜まる場所を作っていくという感じであれば、観光課のほうと情報をタイアップしてやれると興味を持つかもしれないし、こちらもその場所をお借りできれば、そこでちょっとした交流の、文学を離れてもかまわない交流の「どこから見えましたか」という感じでお話していただくとか、参加者に話してもらおうという、そんな感じの交流もできるかなと思うんですけど。見て歩いて、「はい、ここでおしまい、さようなら」じゃなくて、そういうコミュニケーションを取れる場所を一個所作しておく。

○佃委員：確かに今、ちょうど私どもがタイのほうでつくった大学の学生が、日本語研修の日本語ブラッシュアップコースで1カ月半ほど来ているのですが、どこへ連れて行こうかという、日本文化を知りたいというわけです。そこでたまたま出たら、やっぱり鎌倉の円覚寺というところは、学生が行くと、特別にお茶を出してくれて、普段やってくれないことをやってくれるわけです。すると、これが日本をつくった武士の忠信だとか言って、一応文化っていう。だけどひょっと言われて、文京区のどこを見れば一番ポイントになるかなというのは、しなかったなと思って、今ちょっと反省しているところです。

○國分委員：以前ちょっとご紹介したと思うのですがけれども、文京区さんと日本女子大さんの共催で9月末から2週間企画展をやる予定でして、その企画展の内容が今、伊藤委員がおっしゃられた護国寺さん、江戸名所時代に書かれている護国寺さんから鬼子母神堂までの参詣道が江戸時代、名所にありまして、それが今、ちょうど弦巻川って昔、川があったのですけれども。その弦巻川が首都高速の下に暗渠になりまして、今見えないんです。今はもうコンクリートになっているのですけれども、こういう形で江戸時代には描かれていて、こういう形で江戸の庶民はこういうふうに文京区の街並みを歩いたんですよ、ということを今回1つの企画の目玉として準備しているんです。そのときにせっかくだから英語観光ボランティアの方たちにも入っていただいて、外国人の方に英語で書いたしおりを渡して、ご一緒に回っていただくなり、別行動で回っていただくなり。これはこれから検討するんですけれども。そういうことも1つの試みとしてやってみたいなということで今準備はしてるんです。ですから、それがあがる程度、私ども見て手ごたえがあるようでしたら、今おっしゃられたように、それをいろんなところにつなげていけば、せっかくだからそういう道案内の、ボランティアの方も文京区さんは熱心ですし、何らかにつなげていくと思うんです。

○小野委員：日本の文化を知りたいって言われたら、何をお教えするのが一番いいですかね。

○佃委員：困ったのは、日本語そんなにできないのに文化なんて伝えられないじゃないですか。だから、ちょっとぜいたく言うなとか思いますね(笑)。雰囲気なんでしょうね。

○國分委員：具体的なものをお見せするのが一番よろしいのではないですか。ですから今ちょっとお話になったように、道歩きをすれば。それをできれば、ちょっと私が考えていますのは、江戸時代はこうだったと言えば、そうすると今おっしゃられたように、江戸の文化に興味を持つ、そうすると護国寺さんの歴史をそれなりにレクチャーしてあげる機会も起きたり、鬼子母神もそうですし、そういう形が1つの例で。それを広げれば当然文京区は江戸文化の集積場みたいなところですから、湯島聖堂も伝通院もあるわけですから、いろんな形の文化財を発掘できるし、わりと外国人の方は関心持たれると思います。今回9月に、ちょっと試してみようとは思ってるんですけど。

○伊藤委員：掘り下げていくと、そんなに広いところを歩かなくても面白いと思いますね。

○小野委員：今、いろいろお話を聞いて、非常にそれは日本に深く興味を持って探ってみたいと思う人で、留学生などは2年などの限られた短い期間となる。その間、いかに安心して暮らしてもらえるか、また、文京区の素晴らしさを知ってもらえるかと考えると、ちょっと難しいのかなと。

○國分委員：意外にそうでもないのですよ。私も友達から紹介を受けて、留学生とか文京区の中を案内してあげる機会もあるのですけれども、すごい茶髪でロックが好きなような人たちが来るというから、これはそれなりに、今の秋葉原かなと思っていましたら、意外に文京区の中を案内している場合に、今年も護国寺さんの境内を案内してあげたのですけれども、非常に興味を持つ。ということは、何なんだろうなと思って、私も関心持っていていろいろと聞いているうちに気が付いたことは、要するに、彼ら若者は、帰ったら土産話として話したいわけです。日本に来たと。それが、もう秋葉原のマンガだとか、いろんなものは現地でも行き渡ってきているわけです。ですから自分が行った東京のこういうところはこうだった、ということが比較的興味を持って話ができるよう、これは私がお付き合いした範囲の中で言えることですので、また全然違った反応もあるかもしれませんが。意外に今、伊藤さんがおっしゃられた道歩きとか、何か堅苦しいものでなくて、入りやすいものを提供してあげると、いろんな人がいろんな形の反応が出て来ると思います。文京区の中にはいろんなものがありますから、非常に美術に興味を持っている人は永青文庫にしても何にしても、そういう次元の高いミュージネットのところに関心を持たれるかもしれませんし、本当に道歩きで行くと、意外に地元にいると気が付かないんですけれども、文京区というのは面白いものが結構あるんです。ですからそういうものが逆に外国には「面白いね」という場合も。私が付き合った範囲では何回かありましたから。意外に面白いんじゃないかと思うんですがね。

○佃委員：特に、大学さんに少しお金を出して、研究課題で学生に作らせるというか作ってもらう。お金ちゃんと出さないと研究できませんから、学生は観光とか国際化とかを考える視点は常に研ぎ澄ます感覚は持っていますから、そういう人たちを使って、やっぱりそういう視点が面白いと思いますが、地図でも何でも面白い視点の角度、つまり観光といってもただの観光じゃなくて、ワクワク楽しむ、あるいは歴史が何年古いか、そんなのを見たいとか、誰も行かない。だから歩いているうちに面白いよ、というような何か、それこそ河川を歩こうなんて研究にもものすごい力を入れていますから。そういったところなんか、いろいろな視点で海外も研究してるし、日本国内でも研究してるし、何かそういうところで行政がサポートして、完ぺきじゃないけれどもワクワクするような、躍動感のあるようなものを協力して作ってもらうとか、そういうのでないと、既存の行政からは絶対に出てこない。もう時代が変わるんですから。時代が変わってしかも必要なことは、もう分からない、しかも海外から視点が刻々と変わるだろうし、そういう意味では、それができたらいいというのじゃなくて、そこに付けるコメントは「ここには、外国人はこんな形にいるよ」とか「ここで変な外国人に会いました」。何か、そういう学生特有のコメントも入るような、あるいはここではちょっとエッセイ、外国のある国の料理だねとか、このお店に行くと1個だけ、変わった国の料理がありますとか、ちょっと変わった在日外国人がお店をやっていますとか、そういう生き生き感が伝わるようなものというのは、普通の私たちや行政というところではなかなか作れないんですね。インターネットで出たり、本に出たり、小さなものでもいいと思うんですが。視点を少し変えたものがあると。あまりお金を掛けなくて、学生ですから人件費をどんどんくれとかは言いませんし、先生の研究費とか何か調査費などは必要かとは思いますが。あるいは印刷代、その印刷は凸版印刷か共同印刷かよく分かりませんが。そういったところに助けていただいて、もう少し、品というよりも、もうちょっと崩した感じ。確かに江戸時代のこれこれ、樋口一葉の〇〇とって、それなりに格式のある地図はあったりしますが、少し思うのは、イベントのときなども配っていけるとかすると面白いかなという気がするんですけれども。

○久松座長：学生を活用していくということだと、それぞれの先生方、先ほどのうちの大学の話を先ほどしていたのですけれども。それぞれいろんなことをやっているんですけれども、それがまた、先



ほどと同じで、それぞれポコ、ポコとあって、「隣は何をする人ぞ」にだいたいなるわけですね。一番いいのはコンテストをやることなのですが文京アカデミー大学コンテスト、毎年違うテーマでやればいいと思うのです。ある年はまち歩き、ある年は文京区の国際化とか、そういうことで大学があって学生であれば、それこそ予選大会でもやっていただいて、一番いいのが出てきて、それで賞金は少しでもいいのです。名誉が大事で、それからそういうものがきっとホール等でプレゼンができれば、いいものが出て来ればそのこと自体がイベントになりますし、それで必ずしも国際交流だけではなくて、5年に1回ぐらいそれに近いものが出て来れば、そうすると、いろんなところからアイデアが出てきて、まさに昼間の文京区政、区民たちが活躍してくれると思います。ただタイミングがすごく重要なので三月とかは駄目なのです。

○伊藤委員：国際学科みたいな……

○佃委員：みんなが盛り上がる時期に、各大学対抗、つまり例えば野球ですと6大学だとか、首都大学とか、そういうリーグの形のように、少し文京区にある学校の人だけ資格があるとか、そういうふうにして、国際フェスティバルとは別の時期にして、今年はこのテーマで競争させて、大学は今先生がおっしゃったように。というのは、僕はタイでロボットコンテストを海外で始めてNHKでやったんですけど、それは最初は全く駄目で、動きもしなかった、何もしないんだけど、今や50個、100個以上、もう中学、高校まで、大学から高校までどんどん競争して行って、そういうふうに競争心をうまく。そういう意味で若者は大学対抗で。それが例えば研究となると「俺は、もう嫌だ」っていう人もいるし、学校によってそういうのもあるから。だけどそうじゃない、誰もが参加できて、そのアイデアと何かの勝負になると、大学間の格差がないんですね。それを学長さん辺りに、ぜひやって行って、文京アカデミー大学があるわけですから。そういう大学、大学のやつを、文京アカデミー大学が何かのテーマについてコーディネートして、イベントに持っていくとか。そうやると、やっぱり若者を生かすのが一番で、年配者を出すといっても限界があるから。それは学生が生き生きしているときにやらないと駄目で、休みの日に、誰もいないキャンパスでやっても駄目ですね。そういう工夫の必要ですね。そうすると学生に合わせるという考え方をしないと駄目ですね。行政に合わせるのではなくて。

○久松座長：かなりざっくばらんに議論できたと思います。多分事務局側が、あまり私、交通整理をしなかったの、いろんな仕訳でてんやわんやしているかと思いますが、少し休憩をさせていただいて、こちらの時計で7分ぐらい、8時10分くらいまで休憩させていただいて、また8時10分から今度は成果の確認ということで、こちらのほうに着々と水色のものが出ておりますので、簡単に、多分事務局からご紹介いただいて、それでまた我々でそれに対して何か言うことがあれば付け加えていくということで、それで閉めていきたいと思いますが、それでよろしいでしょうか。では8時10分までお休みさせていただきます。

——休憩——

○久松座長：よろしいですか。ありがとうございます。それでは成果の確認ということで事務局のほうからまとめていただければと思いますが、我々もまとめ能力の高い方に感謝することにしまして、よろしくをお願いします。

○事務局：皆様どうもありがとうございました。いろいろ話が深まったところとか、あと、何かみんなモヤモヤと思っているんだけどみたいところが、結構いろいろな差が出たのかなという感じがして聞いておりました。最初にこちらの紙が課題ではなくて、特徴について、文京区にはどういったことがあるんだろう、というのをもう1度検討していただいたものです。前回研究者・留学生が多いということを受けまして、それだけじゃなくて駐在の方で、住んでいらっしゃる方、いらっしゃる方もいるけれども、要するに一般企業等で働いている方というのが、かなり、実はつながりを作

ってくれる人なんじゃないかというようなご意見をいただきました。これは興味を持っていらっしゃる方が結構いるというご意見でよろしいんですね。はい、興味を持っていただいて、かつ具体的につないでいただける方、ちょっと期待できる方みたいなのが駐在員には多いのではないだろうかといったこと。それからやはり大学がありますので、研究者が多い。若手がいるところと、今後もっと増える可能性があるというようなご指摘をいただいております。あと、例えば交流、交流とあるけれども、具体的にもっと助け合えるような関係という交流もあるだろう。単に楽しみのためだけではなくて、本当にお互いの生活ですとか、困ったことを助け合えるような関係というものも考えられないかというご指摘をいただきました。

こちらが前回からいろいろ検討していただいていた交流の目的です。こちらともちょっとかぶってくるかなと思うのですが、交流の目的にはより具体的なものがあつたほうがいいんじゃないだろうか。例えばこういうこともあります。それにちょっとかぶっていますが、お互い困ったときに助け合えること、あとは具体的な企業同士の関係ということから見る交流とか、それから世代を越えた交流が可能なんじゃないか。例えばこういうイベントで世代を越えた交流というのも可能だというようなことをいただいております。またこれは産業についてのご意見が今回多かったような気がしたので、こことここまたかぶってきていますが、産業のところをピックアップさせていただいて、区の特徴としても印刷業、出版社、これが交流の具体的な拠点人になるのではないかというようなご指摘だったかと思います。それから子ども、高齢者といった話もちょっと出ました。子どもたちに対して、特に交流の機会を与えてあげたいというということもありますし、そうではなくて、やっぱり高齢者の生きがい、生涯教育といった点から機会を作っていくということもあるし、こちらであったように子どもから大人までが参加できるといったこと、いろんな世代を対象にいろんなことが考えられますね、というような指摘だったかと思っております。だいたい以上が区の持っている資源ですとか、特徴として、追加事項で挙げていただいたことになるかと思えます。

こちらがいろいろお話をしていただいた間に、我々で一生懸命キーワードを拾ったものでして、後から議事録が録音しておりますので、我々が拾いきれなかったところすとか、微妙なニュアンスとかを議事録が仕上がってくると、これにさらに追加できると思うのですが。まずこの緑色のところが、それぞれのまとまりに対して見出しとして付けられるもので、恐らくこのことが、この後の第3回で、方向性として施策の見出しになってくるんじゃないだろうかと思われるものになります。今、この場でパッと整理したものですので、もしかしたらこの見出しはこっちの下に来る、で、こちらはもっと上に来るというような、レベルの整理がさらに必要になる可能性もあるかと思えます。

ちょっと皆さんのご意見で確かめたかったのが、それぞれのグループについて課題と課題に対する方向性という織り交ぜて話していただいたと思います。1つひとつのグループについて課題だと思われているところと、それに対する解決の方向性だというふうに皆さんが思われているところを確認できればと思っております。まず外国人が安心して暮らせるところというところで、日本での生活を説明してあげることというのが課題だというふうにいただいております。それに対して、なので、ちょっとこれが課題かなと。この辺が課題の表現で、こちらが具体的にサポートをしてあげたらいいのかなという、課題に対する解決の方向性に近いのかなと思っております。これは裏返すと、これをサポートしてあげれば解決になるということかなと。課題と解決は裏返し、ということでこちらはよろしいでしょうか。

次にこちらの外国人が地域社会に参画するためにはどうしたらいいのかということですが、例えばタイフェス、昨日、私の友人も行ってましたけれども、私は行けなかったんですが。タイフェスは代々木公園でやっておりまして。いろんなことをやってみたいと思っている人がいると。そういう人をサポートできればいいよね、というご意見だということにまとめさせていただいてよろしいでしょうか。となると、こういう方がいらっしゃって、表現したいと思っている若者たちをサポートできるような仕組みを文京区として持たないだろうかというようなご意見だということに整理いたします。

こちらは具体的なことが深まっていったところかなと思っております。具体的に既にあるミューズネットワークで、いろいろな企業が参加していただいているということですが、ここがあるんだけど、なかなか使いやすくないということが課題だというふうにとらえてよろしいでしょうか。例えば気軽に頼めるような関係じゃないとか。

○**國分委員**：課題のほうですね。

○**事務局**：そうですね。この辺がミューズネットワークはあるけれど、課題としてちょっと使い勝手が悪いと。であるならば、例えばボランティアの人が希望者をつないであげるようなことですか。ま、これはミューズネットワークの説明になるかと。交流センターを中核として情報提供するようなことがあれば、もっと使いやすくなるんじゃないだろうかとという対応かと思います。交流センターの話が出ました。ここを、もっと人が集まってくれば、情報も集まってくるという言葉がありましたが、たまり場として使えるようにしたいということかと思います。

で、これはちょっと違います。これは、先ほど生活支援に近いのかな。で、観光とのタイアップといますか、観光についてのお話が結構出たかと思います。文京区には文化資源がいっぱいあるということですが、じゃ、どういうふうに我々が使うとみんなに伝えやすいのか、というのが、ご存じの方はよくご存じなんです、あまり全員が知っていることではないんじゃないかということかと思いました。例えばどこに連れて行ってどういう説明をしたらみんなが、特に文京区の中で日本の歴史を感じたりすることができるのかといった点について、英語観光ボランティアとかと一緒に、具体的な場所を見て説明してあげるのが一番分かりやすいというようなお話。それから留学生は秋葉原とか、有名などころではなくて、もうちょっと地域の特徴が出ているようなことに、ちゃんと興味を持ってくれるというようなお話もありました。

次が生活支援のところ。こちらのほうに少し近いのかなと思いました。文京区にきている方は、わりと有名企業の方であったり、有名大学の研究者であったりして、あまり生活に困っている方はいらっしゃらないのかもしれませんが、そうは言ってもそういう支援を、あまり難しくない取り組みを通じてできればいいのかということですね。これは解決の方向性でもありますが、この生活の支援自体が課題ですね。

その中で、例えばせっかくある神社やお寺等々と協力して、場所として使えないだろうか。それにはもちろん住職さんのご協力が必要だということもありましたが。そういうバザールなどができればいいのかなというご指摘でした。

ここがいろいろな施策が考えられそうかなと思ったところなんです、にぎやかで楽しい、何か体験をというようなことになるのかなと思いました。例えば先ほど秋葉原の話がたくさん出ていますが、秋葉原がライバルなかなというような感じでもありましたが。大学がいっぱいある、史跡がいっぱいある文京区、片や、若者が有名でいっぱい来る秋葉原、この秋葉原にきているような人たちを、この文京区のほうに誘導するというか、来ていただくにはどうしたらいいのかといったような課題かと思いました。

で、秋葉原と一緒にいるということではなくて、秋葉原とは違うゆったりした生活感ですとか、例えば出版社は、実は秋葉原以外にあって文京区に多いんだと、そういったことをうまくつなげていけば、文京区のほうに関心を持って来ていただける人というのが増えるんじゃないだろうか。特に今後は中国の方が増えるんじゃないかというような、今後の予想も出させていただきました。

こちらの留学生の活用というふうに、ちょっと暫定的に名付けさせていただきました。大学がいっぱいありますので、そこに来ている若者を行政等々の視点からではなくて、そういう若者の視点から見て関心を持てるようなマップ作りに参加してもらえないだろうか。行政だけじゃもう手詰まりなんじゃないの、というようなご指摘かと思います。

これですね。この辺が課題でしょうか。

○**佃委員**：日本人学生が中心にならないと駄目です。日本人学生を育成しないと絶対駄目。留学生、留学生って期待しても日本人学生に頑張ってもらわないと。

○**事務局**：日本人の学生が中核となって、ということですね。

○**佃委員**：そういうこと。

○事務局：このマップ作りは前回もお話が出ていたかと思いますが、ワクワク楽しくて、歩いているうちに発見があるような、そういう地図等々を配付するようなことで、楽しさを作っていくようなことになるのでしょうか。

あと、最後のほうにかなり話が盛り上がりそうだった文京アカデミー大学生コンテスト、これは皆さんの意見で押すということでしょうか。これは☆か何か付けておきますね。こういったことで、例えばマップ作りなり、あるいはほかのテーマなりをやっていけば、ま、大学が中心になるんでしょうが、かなりの参加が見込めるんじゃないだろうか。で、文京区らしさというものの発信の1つの主体になるんじゃないかというご指摘だったかと思います。

あと、これは事務局からこういったことも話していただければみたいな、メモとして残したものです。あと、ちょっと仲間外れになってしまったんですが、子どもたちへの教育というものもちゃんと、もっと教育委員会と行政で連携を取った対応をしてもらいたいというご意見だったかと思います。この辺が、恐らくこの辺ともつながってくると思いますので、後で議事録で補完させていただきたいと思います。だいたい以上が今回の話のまとめになるのかと思いますが、「いや、そういうつもりで言ったんじゃないけれど」とか「これを書いてもらわないと困る」というようなご指摘はございますでしょうか。

○國分委員：私のほうから1点ありますのは、ミューズネットワークというのはネットワークですから、これをうまく仕組みとして活用するためには、その下の交流センターというのが核にないと、センターがあってネットワークですから、それはつなげていただいたほうがよろしいと思います。そういうものを活用するために、どうしてもセンターという箱があるんだという、単なる箱じゃなくて。ネットワークとつながっているから機能するんだというふうに具体的に書いていただけたらいいと思います。

○事務局：センターがネットワークの中核になるということですね。

○國分委員：そこですね、そこと上とがつながっているわけです。それから観光とのタイアップということよりも、前回も出たと思うんですが、文京区のほうで育成した人材の活用というほうがよろしいと思うんです。ですから英語観光ボランティアだけじゃありませんので、インタープリターにしても、生涯学習支援にしても、また文京アカデミーの各サークルが、今日も話に出ましたけど、さまざまありますから。それに限定しないで、そういう形にさせていただいたほうが分かりやすいと思います。それは、たまたま私が企画のときに英語観光ボランティアの方と、今そういう企画を立てていましたよ、という話をしましたので、それがそこに入ったのかもしれない。

○事務局：はい。ほかにもいろいろ人材はいるということですね。

○佃委員：生活支援とって、文京区の場合は多分、ちょっと生活支援というと、昔の発想で、それは少し貧しいから何かって、そうなるので、もう今はほとんど99パーセントないと思います。むしろ、一緒にそこに参加して、自分のものを売ったり、バザーで自分の土産に持っているものを売ったりとか、仲間ですね、同じ場所で同じようにわいわい騒ぐ、そういう場所を提供する工夫のほうが必要だと思います。

○久松座長：参画支援。

○國分委員：金銭的なことよりも。

○佃委員：金銭はもうほとんど、結果的にあったとしてもいいけど、別に悪いことじゃないけど。もう時代は変わってると思います。

○**國分委員**：大都会のあるところは、またちょっと違うのかもかもしれませんがね、文京区はね。

○**佃委員**：また本当に、どこかある特殊なところはあるかもしれませんが、少なくとも文京区については、そこは自由でいいのではないのでしょうか。

○**事務局**：まるほど、そういうことですね。機会の……

○**佃委員**：うん、仲間と一緒に楽しむという、バザーなんて一番、これは売った、買った何とかといって、そういう雰囲気って、誰でもが参加しようと思えばできるじゃないですか。

○**國分委員**：楽しい雰囲気ですものね。

○**事務局**：それ、いいですね。はい、了解いたしました。ほかに何かこの機会にご意見いただければと思うんですけど。何かこういう言葉いいんじゃないだろうかとか。あと具体的には、こういった例えば活動があります、それはこういうふうに皆さんを支援できますとか、皆さんが一番詳しいところかと思われるんですが。こういう人材がおりますとか。

○**國分委員**：今日は本松委員がいらっしゃらないのですが、前回私と本松さんでちょっと意見が合ったところが、今日はこんなのがありましたから、あえて言わなかったのですけれども。伝達人ジュニアとして国際交流に参加できる小中高生とか、これが姉妹都市協定とか、それとつながるんですね。例えばそういう子どもたちの人材を育成して、例えばホームステイとかそういうときに、きちっと文京区をPRできる、そういうものの育成が必要だろうとか、そういうイメージなんですけど。それと、今日森岡委員のお話になった、中国との具体的な例として挙げられましたよね、論語の。それは中国とのあれだったんですけども。全般的にそういう企画は考えるべきだとは思いますが。単なる子どもの育成というよりも、そういう具体的な目的で、国際交流という目的に小中高生が、だから単なる英語の勉強ということじゃなくて、要するに国際交流というものを目的としたジュニアを養成するというようなイメージですね。

○**伊藤委員**：よろしいでしょうか。その姉妹都市、海外都市との交流、今までの感覚で行くと、どっちかという文化、日本独特のものをお伝えするとか、そういう感覚が強かったかなと思うんですけど。この間ドイツへ行ったときも、そうじゃなくて、ワークライフバランスをテーマにしましたし、今度6月25日に小野課長のほうから、私どもがかかわっている文女連のほうに、中国の訪問団、昌平区の方々6名が見えて交流をするということになって実施されるのですが。その目的がやっぱり女性・子ども分野の関連部署の方たちが見えるんです。ですから女性・子ども分野のっていう、いわゆる社会的なこと、生活レベルの交流が行われるわけなので、この間のドイツもそうだったように、そういった面の交流というか、同じ人間としての生き方というか、そういった面の交流ということが、これからは大事なのかなと。労働条件だとか、そういったような生活レベルのことを話し合うという上では、大いに参考になって交流は大事なことかな、姉妹都市というのは大事なことかなというふうに思います。

○**事務局**：ありがとうございます。

○**伊藤委員**：ええ、前回は私言ったと思うのですが。たまたま中国の方が見えるのも、そういう内容でお見えになると、今日いただいたものですから。

○**事務局**：はい、分かりました。あとは議事録を起こさせていただいて、さらに追加させていただいて、第3回、1カ月後くらいになりますけれども、そのときに体系として、第1弾の関係を皆さんにお見せできればというふうに思っております。本日いただいたご意見等々、そういう体系の説明文と

して活用させていただくことになるかと思いますが。今、お見せしているものと、また少し整理の方法を変える可能性もあります。そのときには第3回のときに、また追って説明させていただきたいと思います。もし何か思いついたことがありましたら、この後ご意見シートもございますので、そこにぜひいろいろたくさんお書きになってください。よろしくお願いいたします。

○**久松座長**：ありがとうございました。ということで、次回第3回分科会では整文化された分野別の計画目標方針が叩き台として出てきますので、我々で必死になってハンマーを持ってきて叩こうと、いうことになります。では次回の日程について事務局のほうからお願いいたします。

○**事務局**：はい。まず日程の前に1つ補足の説明をさせていただきたいと思います。今日挙げていただいた中での見出しの1つとして「観光とのタイアップ」というところがありますが、観光分科会でも検討しているところがございますので、そことの整合性を見ながら進めてまいりたいと考えております。

○**久松座長**：すみません、ちょっといただいて。先ほどもお話がありましたけれども、我々の分科会はほかの分科会に先んじて進んでおりますので、多分ほかの分科会にいろんなところでインパクトを与えられるんじゃないかというふうに思いますので、その点もよろしくお願いいたします。

○**事務局**：第3回分科会のスケジュールにつきましては、前回お配りした今後のスケジュールのとおり、6月21日月曜、午後6時半からシビックセンター10階の1001会議室が会場になります。

○**國分委員**：これは2つじゃなくて、私たちは10階のほうなのですね。

○**事務局**：よろしくお願いいたします。

○**久松座長**：そのほかに何かあれば。

○**事務局**：席上配付をいたしましたご意見シートにつきましては、5月31日月曜日までに本日の分科会につきましてのご感想・ご意見、お気づきになられた点などがございましたらご記入いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○**久松座長**：では、これで第2回「文京区アカデミー推進計画策定協議会 国際分科会」を終了いたします。お疲れさまでした。

以上